

レオン・ド・ロニー『若干の日本語辞書に関する考察』
(LÉON DE ROSNY; Remarques sur quelques dictionnaires japonais) <1858年> 訳解

大 橋 敦 夫・柳 浦 恭

はじめに

アベル・レミュザ (Abel Rémusat 1788—1832) 以降、今日に至るフランス東洋学の歴史の中で、日本語学では最高峰とされる天才的日本語学者⁽¹⁾レオン・ド・ロニー (1837—1914) は、さまざまな学問領域にわたる夥しい著作を残している。⁽²⁾専門の日本語に関する著作では、『口語文語日本語入門綱要』(1854年)『日本語考』(1856年)『和法会話対訳』(1865年)などがよく知られている。このうち、『日本語考』は代表作と言ってよいものであるが、その内容は、以下のような構成になっている。⁽³⁾

- | | |
|--|-----------------------|
| I. 日本語の起源 | V. 漢和言語及び文学 |
| II. 日本に於ける漢字の使用 | VI. 日本の書籍 |
| III. 日本語の表記・音節表 | VII. 片仮名・平仮名の読み方の練習問題 |
| IV. 日本語文法 (名詞・実体詞・形容詞・
動詞・副詞・後置詞・接続詞・間投詞) | VIII. 草書体 |

分量的には文字への興味が強く、説明が多くなっているところに特徴がある。⁽⁴⁾文字への興味はロニーの一貫した態度であった(後述)。それは、後の著作『若干の日本語辞書に関する考察』(1858年)『和漢字洋訳』(1864年)へとつながっていく。

本稿では、文字を扱った日本語辞書について述べている『若干の日本語辞書に関する考察』の内容を翻訳によって確認し、ロニーの日本語観の一端を垣間見たい。

1 書誌および内容

アジア協会の機関誌『DU JOURNAL ASIATIQUE』に発表されたもので、架蔵のものは、大きさタテ22.1cm、ヨコ13.6cm、薄縹色の表紙で簡易に糸綴じされている。

内容は、扉(P.1)・見返し(P.2)に続いて本文(P.3—24)が始まる。取り上げている辞書は、『書言字考』(P.3—19)『手引節用集大全』(P.19—21)『文翰節用通寶蔵』(P.21—22)『會玉篇大全』(P.22—24)『新增字林玉篇』(P.24)であり、近世期の国語および漢和の代表的辞書には、頁を割いている。特に『書言字考』については、全体の8割近くをあてている。

2 翻 訳

〔扉〕

若干の日本語辞書に関する考察
およびそれらの辞書に含まれる説明について

レオン・ド・ロニー著
パリ アジア協会評議員
フランス東洋学会書記補佐
アメリカ合衆国東洋学会通信会員

パリ 帝国印刷所 1858年

〔見返し〕 アジア協会会報 1858年
第4号より抜粋

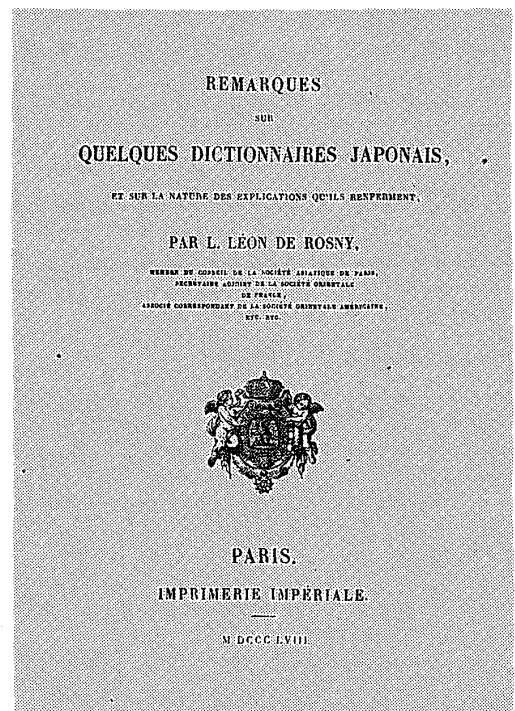
〔本文〕

若干の日本語辞書に関する考察

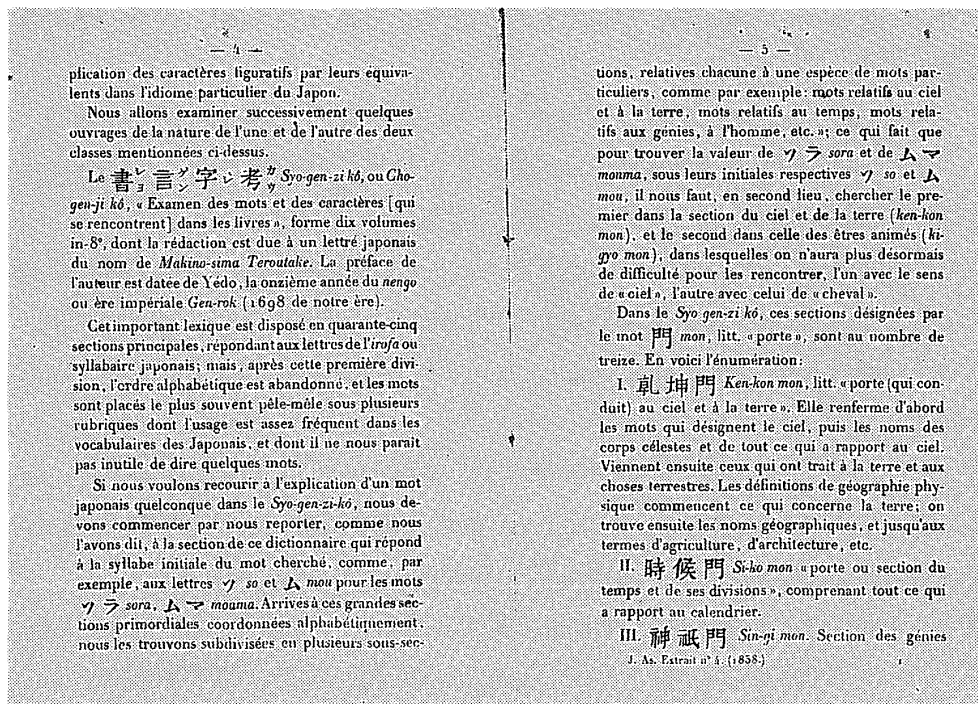
本稿における筆者の目的は、日本人の手によって出版されたいくつかの辞書についてその性質、傾向を考察することにより、この東洋の島国の言語や文化に関心を寄せる人々の便を図ることにある。

日本の辞書は少なくとも我々が入手したものに関しては二か国語、すなわち日本語と中国語とを併用しており、これらは二つの範疇に分けることができる。一つめは日本語の語彙に基づきいろは順に語彙を配列したもので、これはしばしば漢文を書く習慣を持つ日本の知識人に対して彼らの母国語に対応する表意文字のさまざまな記号（漢字）を示すよう配慮されている。もう一つはいわゆる漢和辞典で、漢字の意味を日本に固有の慣用表現を用いて説明しようとするものである。

書言字考（ショ ゲン ジ カウ）（書物に見られる言葉や文字の吟味）は十巻からなり、編纂は榎島昭



ロニー『若干の日本語辞書に関する考察』（1858年）扉（上）と本文（次ページ）



武（マキノシマ テルタケ）という名の日本の知識人の手によっている。編者による序文の日付は江戸時代の元禄十一年（西暦1698年）とある。

この重要な辞典は四十五の主たる部分に分けられており、いろは、すなわち日本の音節文字に対応している。しかしこの最初の区分のあと単語は音節の順番ではなく、雑然といくつかの項目のもとに配列されている。こういった項目を分類に用いる慣習は日本の辞書ではよくみられることであり、多少の説明も無駄ではないように思われる。

もし我々がこの辞書で何らかの日本語の単語を調べる際には、すでに述べた通り、まず目的の単語の最初の音節に対応する辞書の部分を参照しなければならない。たとえばソラ、ムマならばそれぞれソとムの部分を参照する。このようにして音節順に配列された部分を見つけたあとは、いくつかの下位項目のもとにこれらの単語が分類されているのを捜し出すことができよう。これらの下位項目は天地に関するもの、時間に関するもの、神に関するもの、人間に関するものなどに分かれており、個々の単語はその意味によってどこかの項目に分類されている。ソラの意味は天地に関する部分（ken-kon mon）を、ムマの場合は生き物に関する部分（ki-gyo mon）をそれぞれ参照すればもうそれほどの苦労もなく見つけ出すことができる。

書言字考では意味による下位項目は「門」と呼ばれており、その数は十三にのぼる。以下に列挙していこう。

I. 乾坤門 ken-kon mon（天地に通じる門）。この項目は空を表す語彙、天体の名前、空に関係のある単語を含む。また大地や地上の事物に関係のある語彙もここに分類されている。自然地理学の用語は大地に関する部分の最初に見られる。ついで地名、農業や建築に関する単語に至るまでがここに含まれている。

II. 時候門 Si-ko mon（時とその区分に関する門）。暦に関する語彙はここに分類される。

- III. 神祇門 Sin-gi mon 天地の神々に関する項目で、日本人の宗教、すなわち神道¹ や仏教² に関する語彙を含む。
- IV. 官位門 Kwan-i mon 官位に関する部門で、日本と中国の役職名などが扱われている。
- V. 人倫門 Zin-li mon 人間や血縁関係に関する項目で、略歴とともに君主の名前、偉人や著名人、聖職者や軍人、学者や芸術家などもここに記載されている。
- VI. 肢體門 Si-tai mon 人体に関する項目で、ここには解剖学的な用語や精神の働きを表す語が含まれている。また、病気の名前もこの部門に属している。
- VII. 氣形門 Ki-gyo mon 生物に関する部門で、我々の間にみられるものとだいたい同じ動物学の語彙を含む。
- VIII. 生植門 Syo-syok mon 植物に関する項目で、本木に続いて草類の名称が含まれている。なお、後者に関しては主として中国の Hon-zo という書物からとった説明が加えられている。
- IX. 服食門 Fan-syok mon 衣服や食物に関する項目。
- X. 器財門 Ki-sai mon 家財道具や貴重品に関する項目で、掃除道具、楽器や武器も含む。
- XI. 言辭門 Gen-zi mon 語句に関する項目。複合的表現、語法、諺や慣用表現などを含んでいる。動詞、形容詞、副詞、小辞などもここで扱う。
- XII. 數量門 Syou-ryo mon 数や量に関する項目。書言字考のこの興味深い部分については後にまた触れることにする。
- XIII. 姓氏門 Zyo-si mon 日本人の固有名詞を扱う部門。

こういった語彙の配列の仕方は優れたものとは言い難く、しばしば時間の浪費となることは認めざるをえない。しかしながら、ひとたび書言字考や同様の方法で編纂された辞書類の使い方に慣れてしまえば大抵の単語は不慣れな人よりもはるかに早く捜し出すことができるようになるというてよい。

この点については実践のために多少の説明も無駄ではないと思われる。

たとえばヤマ、カワ、テラ、バシ、その他同様の語を含む地理上の名詞に出会ったときにはまず天と地に関する最初の部分を参照しなければならないことは容易に理解できるであろう。カミ、シン、ミコト、ヤシロなどの語は天と地の神々に関する項目を思い起こさせる。また、総称的なトリ、ヲイ、ウオ、ムシなどの語は生物に関する部門を、キ、クサ、ハナなどは植物に関する部門を参照すればよいわけである。

1. 神道 シンタウ

日本人によってシンタウ、文字どおり「神の道」と呼ばれる古代からの宗教で、ミカドを代表者・首長としている。この宗教では日本列島を生み出した神々やその子孫とされる英雄を崇拝する。

2. 佛道 ブツタウ

文字どおり「仏の道」のことで、仏陀の宗教的教えを指す。日本へ紹介されたのは我々の暦で572年に遡る。(なお、Momoire sur la Chronologie japonaise p.10 および les Annales de philosophie chretienne 1857 を参照されたい。)

* 「道」という語はサンスクリット語の “boddhi”, つまり霊的存在、さらには宗教と同様に解釈されなければならない。

しかしながら、これらすべての部門のうちでもっとも頻繁に参照する機会があるのは言辭、すなわち「単語」というあいまいな名称で呼ばれる部分であろう。ここにはすべての日本語の動詞が収められており、これらは日本語文法を一通り把握してさえいれば文法的形態、すなわち語尾によって容易に識別することができる。同様に形容詞や副詞も話し言葉、書き言葉のどちらでもその形態によってたやすく区別することができる。

書言字考の中で用いられている日本語の表記法は通常 kata-kana と呼ばれるもので、周知のように全部で四十七の異なった音節からなっている。我々がいま取り扱っているこの辞書は四十四の部分しかないが、これはイと井、ヲとオ、エとエなどのいくつかの母音が語の意味を変えることなく混用されているためである。文字の発音、入れ替え、省略やその他の音便上の規則などについてはここで改めて触れる必要はないと思う。

書言字考で扱う語彙は純粹の日本語か、あるいはもとは中国語だった単語が時のたつにつれて日本語の中に入り込んできたものかのどちらかである。後者の場合は編者の説明に加えて対応する純粹の日本語を参照するように頻繁に注がついている。たとえば天地（テンチ）¹ という表現をみると、漢語の同意語のほかに「ア」の部分参照するよう出レ安と注がついている。そこでこの部分を引くと同じ漢字に純粹の日本語の読みをもった天地（アメツチ）を見つけることができる。引用文献の示し方については中国と同様の方法を用いており、ここでは詳しくは扱わないが、野線や——|——のような線で説明や引用文から区切った余白の部分に書名をあげている。

日本語の単語のさまざまな意味は類義語や漢語の同義的表現などを、説明に適切な小辞、とりわけ「也」などの助けを借りて示してある。またこういった説明のほかに書言字考の編者は個々の日本語の単語に対していくつもの漢字を対応させていくというやり方を用いることもあり、これらの漢字からその日本語の単語が持つ多様な語義を推し量ることができる。これに関しては具体例があれば私の言わんとするところはより明確になると思われる。たとえばハジメという語を例にとって考えてみよう。書言字考をみると次のようになっている（P 22, c. II）。

翻訳と解説 ハジメは数の一を意味する。一は数字のもとになるので根源という意にもなる。初は起源、始ははじまり、元は根本原因、甫や肇もまたはじまりを意味する。Chouë-wen という書物によると肇は始、首は

草 創 ^同	首 ^同 權 ^同 輿 ^同	一 ^レ 初 ^同
左 ^同 出 ^同	計 ^同 出 ^同	始 ^同
果 ^同	濫 ^同	元 ^同
終 ^同	觴 ^同	甫 ^同
畢 ^同	良 ^同 出 ^同	肇 ^同
		始 ^同 [説文]
		也

※享保二（1717）年版本と比べると、「初」の下にある「壘」とその割注が落ちている。

1. 本艸…前ページVIIIに関する注（筆者注）

Hon-zo は今日では植物学、博物学、そして薬学の解説を集めた著作として中国と日本で知られている。その配列の大部分は Li Chi-tching（李時珍）という人が十六世紀の終わり頃出版した有名な著作に準拠している。

頭部、權輿や濫觴¹ はやはりはじまりを意味する。その他、草創は動作などののはじまり、現われ、果は本当に、まさしくの意、終はおわりを、畢ははじまりを意味している。

ここでこれらの漢語はおたがいに類義表現ではないことに注意を喚起しておきたい。これらはすべてハジメという日本語の語義を表わしているがそれだけのことであり、さもないと終と初を同義語であると誤解することになりかねない。この例はちょうど英語における the end of a string のような表現において end が始めと終わりの両方を意味するように、日本語そのものとしては矛盾を感じることなく理解することができる。

書言字考にはインドから仏教とともに入ってきた表現も含まれており、これらのうちには転記のさいに生じるわずかな変化を除けばほとんど元の形を保っているものもある。以下に例をあげておく。

薄 ^ハ _フ Baggavon.	菩 ^ホ _フ Bosat.	伊 ^イ _イ Ibosok.
En sanscrit :	En sanscrit :	En sanscrit :
伽 ^ガ _ガ भगवान्	1 बोधिसत्त्व	菟 ^ホ _ホ उपासक
梵 ^ホ _ン Bhagavân ¹ .	薩 ^サ _ツ Bôdhisattva.	塞 ^ソ _フ Oupâsaka.

その他の表現については、チベットでよく行われているように原語を翻訳したものもある。次のような例をあげておこう。

如 ^ニ _ヨ Nyo-rai	善 ^ゼ _ン Zen-sei.	梵 ^ホ _ン Fon-ten-wô.
En sanscrit :	En sanscrit :	En sanscrit :
1 तथागत	1 सुगत	天 ^テ _ン ब्रह्मकायिकराज्ञन्
來 ^{ライ} _イ Tathâgata.	逝 ^{セイ} _イ Songata.	王 ^ワ _ウ Brahmakâyika-râdjân.

ここで注目すべきことはインドの原語が純粋な日本語ではなく漢語を用いて翻訳されていることである。このことは仏教の教えがインドから中国を経由して日本列島に入ってきたことを我々に思い起こさせてくれる。

人倫という部門ではすでに触れたように、著名な人物の名前が時として相当に詳しい伝記的

1. これらの二つの語は中国人の意識の中ではいわば単一の概念にすぎず、いわゆる宇宙を意味している。…前ページ「天地」に関する注（筆者注）
2. 書言字考の原本を所有していないため、本稿での引用はすべてシーボルトの指導のもと中国人の書家郭成章 Ko Tching-tchang によって石版刷りされた版によっている。…（P 22, C II）
1. 文字どおり「杯を浮かべる」の意味。水が流れ始める水源やまだ杯しか浮かべられないような場所について用いられる表現。ここから「始まり」の語義が生じてくる。
1. 日本語に転写した baggavon という語形はサンスクリット語の主格の形 bhagavân に対応しているように思われるが、書言字考ではサンスクリットの絶対形 bhagavat を思わせる婆伽婆という書き方も用いている。

解説とともに扱われている。

また博物学は書言字考で重要な位置を占めており、それぞれの音節のもと二つの「門」が含まれている。ひとつめは動物の部門で、ふつう獣と呼ばれるような哺乳類（四つ足動物、猿を含む）、鳥類、魚類、鯨目、両生類、昆虫やミミズのような虫などがこれにあたる。ふたつめは植物の部門で、種類はより豊かではあるけれどもその配列のしかたは必ずしもより論理的とはいえない。植物界で一番大きな樹木から始まり、果樹、花、草という順に扱われている。このうち大部分のものには注釈がついており、大きさ、花の色、葉の形など、記述と実用の両面からさまざまな情報を得ることができる。そしてこれらの植物が中国や日本でどのような用途に用いられるかも示してある。ただ本書では中国の本艸（Pèn-t'sao）という書物からの引用が多く、日本の博物学は特に植物に関して中国よりも優れた著作も少なくないことを考えると、この点はいささか残念に思われる。

また、専門用語の大部分にはそれぞれ漢語の同意表現があげられており、このことは西洋の科学におけるラテン語の場合と同様に術語の定着を著しく容易にしている。日本人にとって漢語はちょうどヨーロッパ諸国でのラテン語と同様の役割を果たしており、学問的な術語に用いられる。これに対して純粹の日本語は通俗的で、ヨーロッパの各国、各地方で用いられる土着の言語と似たところがあるといえよう。

ここで各々の日本語の音節、すなわちイロハのうちで最も重要な部分を占めている言辭門について考えてみたい。この部門には言語を形成する表現の大部分だけでなく、慣用表現やことわざ、格言なども含まれており、このために日本の文学や日本人の風俗習慣の研究にはより興味深く、そして役に立つものになっている。重要な位置を占める動詞は独立した形態、すなわち不定詞の形で与えられており、語根は他の語句と一緒に複合表現を作る場合を除けばみられない。動詞的に用いることのできる形容詞は通常「シ」という語尾とともに示してある。最後にいわゆる小辞と呼ばれ、中国語文法の虚字に対応するものが扱われているが、日本語の代名詞は前述のようにここではなく人間の部門に含まれている。

書言字考の最後に置かれている数の部門、すなわち數量門は特に注意に値する。この部分には数に関係する重要な表現、たとえば「二人の親」、「四つの季節」、「五つの基本要素」、「六つの教養学科」、「七つの情念」、「九つの空」などの固定化した表現が含まれており、これらの理解は文学作品の理解に欠かせないためである。書言字考の解説なしにこういった数量に関する慣用表現を理解することは大変難しく、良い辞書がないときにこの困難がどれほどのものであるかは同書からいくつかの例を適当にあげるだけで明確になってくる。

二尊 ニ ソン Ni-son 二人の仏陀のこと。

二藏 ニ ゴウ Ni-zo 声聞と菩薩を相手として説かれた二つの法蔵のこと。

二諦 ニ テイ Ni-tei 二つの真実のこと。

二道 ニ タウ Ni-to 文と武の二つをさす。

二帝 ニ テイ Ni-tei Yao（堯）と Chun（舜）の二人の皇帝をさす。

二紀 ニ キ Ni-ki 二つの輝く天体、すなわち太陽と月のこと。

二氣 ニ キ Ni-ki 二つの根本原理, 男性と女性のこと。

二周 ニ シュ Ni-syou 中国 Tcheou の二つの王朝をさす。

こういった例はいくらでもあげていくことができるが、これだけでもこの部門の重要性、実用性は容易に理解できよう。これは書言字考の補遺をなしており、San-thsang-fa-son という大きな仏教用語辞典に比べればその規模は限られている。しかしその範囲はインドや仏教関係の用語にとどまらず、日本に固有の数量表現を扱っているために興味深さと独自性という点で高く評価できる。以下にいくつかの実例をあげてみよう。

NI-to 二つの島の意味で、壹岐と對馬のこと。

Ni-syo so-beo 伊勢と石清水のこと。

San-kok 三つの王国の意で、天竺、支那、日本のこと。

Ten-zin sitsi-dai 七代の神々の意で、國常立尊 クニートコータチ ミコト、國狹槌尊 クニササツチ ミコト、豊斟渟尊 トヨクムソーノ ミコト、沙土泥尊 ウーヒツミ ミコト、大戸道尊 オオートーチーノ ミコト、面足尊 オモータルノ ミコト、伊奘諾尊 イザーナギーノ ミコト₁ をさしている。

このような数量に関係のある表現は十まで続き、さらに Thang 王朝の二十人の皇帝、二十二の寺、二十五人の菩薩など、倍数表現も扱ってある。

次に筆者が扱いたいと思っているのは手引節用集大全（て ひき せつ よう しふ たい ぜん）という書物で、約二万五千の語句を収録している。序文の日付は文化五年（1808年）となっている。これに次いで書言字考の場合と同様の方法で各音節ごとに分類した語句をさらに分けるための十三の部門について解説が行われている。このすぐ後には四十七のいろは文字、すなわち日本語の音節がひらがなとカタカナの両方で提示されており、さらに同書のさまざまな部門の始まりを示すページ数を知ることができるようになっている。

ここで手引節用集大全の語彙の記述方法に触れてみたい。各々の段のひらがなの部分にはこの辞書で扱う語彙が、次の行には日本で用いられる表意文字のくずし字体が表示されている。残る他の二行はより角ばった字体で書かれており、最後の行はひらがなの部分に示された日本語の語彙を説明する漢語表現を、最後から二番目の行にはその中国語の発音が載っている。ここで一言付け加えておくべきことがある。ひらがなで表記された語彙はもともと中国から入ってきたものだが、原語とはかけ離れてしまっていることもある。こういった場合、カタカナで表記された三行目の部分には漢語表現の中国語発音ではなく、これらの漢語と同意の日本語が示されており、日本語化された発音は音節の順序に従って最初のひらがな表記の部分に見いだすことができる。

この書物にはいくつかの補遺があり、とりわけ四體千字文（し てい せん じ もん）は

1. 書言字考の編者はこれらの神々の配偶者の名前をあげているが、ここでは省略する。いたずらに長くなるのを避けるためである。興味のある方は Memoire sur la Chronologie japonaise を参照されたい。

千個の漢字を四通りの字体で表示してあり、これらの表意文字の日本語式発音と日本語訳が与えられている。ここでこれ以外に手引節用集に付属する地理的図表や歴史年表等については扱わないことにする。これらは他の著作にもっと詳しいものがいくらかでもみられるためである。

手引節用集に印刷や語彙の配列などの点で類似しているものとして文翰節用通寶藏（ぶんかん せつ よう つう ほう ぞう）をあげることができる。これには三十一ページにわたる前置きと六ページ分の補遺を含んでおり、約一万五千前後の語句を扱っている。語彙の配列に関しては前述の手引節用集とほぼ同じだが、語彙項目の後で定義や説明をひらがな表記で与えてあるという点では異なっている。このことともう一つ、収録されている日本語の語彙の大部分に関して中国語の類義語を多く表示してあるという部分では手引節用集に勝っているが、また一方で節用集の方は収録語彙の数という点で利点がある。我々が先ほど補遺と呼んだ部分は日本についての図解入り小百科とでもいうべきものとなっており、ここには中国文字の図表（現代と古代の字体）が含まれている。この図表は「名乗」、すなわち日本人の固有名詞を扱う箇所の一部をなしている。中国の文字、とりわけ古代の字体で書かれたものは印璽や序文の終わりに名前を記す際に日本人が用いることもあり、我々がざっとみてきたこの書物の終わりには印璽の例がいくつかあげられている。

さてこれから漢和辞典について言及していきたい。中国語から日本語というのは通常日本語のテキストを解釈する時とは逆の順序になるわけだが、それでも我々が関心を持つ領域の研究にとってその価値は決して低くない。

最初のものは會玉篇大全という四巻からなる書物で、今我々が手にしている版は毛利貞齋という通訳によって出版された。日付は安永の九年（1780年）となっている。本書は Yu-pien（玉篇）という名で知られる有名な中国の辞書を再版したもので、原著の説明を日本人にとって理解しやすくするために表意文字の日本語訳やその他の注釈が加えられている。この版には本文中で用いられる略語の一覧表があり、用例の借用や難点の説明などに参照した辞書類の書名を知ることができる。また本書の前置きの部分には語根を見分けることが難しい表意文字の一覧表が用意され、これらの文字の配列は画数を基準としている。

本書の内容を知る手がかりとして、最初の語を具体的に考察していこう。

それは「一」という文字で、中国語では yih と発音する。この記号の両側に日本語のカタカナ文字が イチ 一 イッ のように添えてあり、この文字の日本語での発音を知ることができるようになっている¹⁾。これら中国の表意文字の日本式発音を知ることとはとても重要であり、こ

1. 「一」という漢字の発音は、中国語と日本語の間でさほど変わりがない。しかしながら、その他の文字の日本語での読み方は、玉編のような辞書の助けなしで見当をつけることは難しいと思われる。また二国語間での発音の対応関係を規則立てて理解できたとしても、長期間にわたる練習があつて初めて常に正確な発音を得ることができる。たとえば、次のような漢字の中国語と日本語の発音を比べてみるとよい。「女」(chin. niu ; jap. dzyo, nyo), 「力」(chin. lih ; jap. ryok, rik), 「作」(chin. tsoh ; jap. sak), 「万」(chin. wan ; jap. ban, man) など。

の知識なしでは日本語の文章中に用いられ、中国研究家にさえ理解困難な複合表現の意味を辞書で知ることは極めて難しい。なお、それぞれの文字には日本語の説明が加えられており、「一」の場合はヒトツ、ハジメ、ヲナジ、スクナシ、モツハラ、ヒトへなどの語句が与えられている。またさらに、本文の上部や横側にも日本語の注釈が頻繁に施されている。

次に筆者が触れておきたいのは新增字林玉篇という優れた辞書である。日付は文政三年(1828年)で、二千近い文字が日本語のカタカナによる説明とともに収録されている。前書との違いは中国語訳がほとんどすべて省略されていることで、この点では見劣りするものの、日本語の説明の多さ、より鮮明な印刷は使いやすい版型と相まって、本書を旅行者や日本語研究者にとって極めて貴重なものとしている。

3 本書の特徴とロニーの日本語観

全体の記述内容は、取り上げたそれぞれの辞書についての解説を中心としており、ガイドブック的なものと言える。なお、紙幅の都合か、まとめの部分がなく、唐突に終わっている。

また、すべての辞書を同等に扱わず、『書言字考』と『會玉篇大全』とに記述のポイントを絞っている。これは、両書の日本語研究における重要度を理解してのことであろうし、また、ロニー自身の関心の表われでもあろう。両書とも、それぞれ近世を代表する国語辞書・漢和辞書である⁽⁵⁾。

ロニーが『書言字考』に注目していたのは、以前からシーボルトの発行した『書言字考』(1835年)を研究し、乾坤・時候・神祇・官位・人倫・肢體・氣形・生植・服食・器財・言辭・數量附日本姓氏の十三部門の語をそれぞれカードに取り、これをアルファベット順に排列し、簡単なそして利用しやすいものに作り直そうと試みようとしていたことも関係していると思われる⁽⁶⁾。

ロニーは、その日本語研究の出発段階から、日本語の文字への興味を抱いていたと言える。それは、日本語研究に関する事実上の処女作『日本語研究に必要な知識の概要』(1854年)の内容が、小冊ながら片仮名・平仮名・綴字法・漢字について略述し、213個の漢字の解説を付すなど、日本語の文字を主に対象としている点に現われている⁽⁷⁾。この文字重視の姿勢は、『日本語考』(1856年)の本文における文字に関する豊富な記述量となって現われる(前述)。

さらに、1863年、パリの東洋語学校で行なった日本語講座開講講演でも、先行のキリシタン日本語学を批判しながら次のように述べている⁽⁸⁾。

言語を転写するためにラテン文字を用いていることに関しては、日本人が音ではなく、事物とか觀念の性質を呼び起こす記号を用いていることを考えるならば、それがいかに不十分であるかが、容易に分かります。異綴同音語が現われる場合、それは数多くありますが、ラテン文字に転写された日本語の本文はまったく理解できません。

また、後年の『日本文法初歩』(1873年)においても、

彼ら(宣教師たち)は、現地の文字を取り扱おうとはせず、漢字(の複雑さ)を悪魔の所業とみなした。そして日本語の単語をラテン文字に置き換えるだけにとどまった。もし、こうした文

法書が話し言葉の情報を伝えるだけのものだったならば、それは欠点ではなくむしろ長所となつたであろう。というのは、文字は日本語の二次的用法だからである。人は会話においては音声を使うのであり、決して文字を使うのではないからである。そして会話のスタイルだけしか学ぶつもりのない入門者は、学習の初期の段階で、膨大な漢字古文書を前にしながら、それを後回しにすることができないのである。

と述べている。⁽⁹⁾ キリシタン日本語学の成果の中には、漢和辞書『落葉集』もあり、ロニーの言を鵜呑みにするわけにはいかないが、文字への関心から立論していることがはっきりと示されているところである。

『和法会話対訳』など会話書の著作もあるものの、なぜ、ロニーは文字重視の姿勢を貫いたのであろうか。それは、アルファベットを用いる言語にはみられない、日本語という言語における文字使用の特質をとらえたからであると同時に、彼自身、会話よりも読解を得意としていたことも影響していると考えられる。⁽¹⁰⁾

以上をまとめると、ロニーの『若干の日本語辞書に関する考察』は、当時の基本的な日本語辞書の使用ガイドブックということができ、その日本語研究において、終始文字重視の姿勢を取り続けたロニーによる初期の実践的解説書と位置付けられる。

注

- (1) 杉本つとむ氏『西洋人の日本語発見 外国人の日本語研究史1549～1868』（創拓社 1989.3）
- (2) 谷口 巖氏（1987）によると、パリ国立図書館所蔵のものだけで228あるそうである。
- (3) 三沢光博氏（1965）による。
- (4) 注1前掲書による。
- (5) 高梨信博氏は、『書言字考』について、施注率の高さから類義語辞典としての機能も持ち、表記のみならず、表現の次元をも含む「江戸時代を通じて、もっとも整った節用集の一つ」と評されている。（同氏『和漢音釈書言字考節用集』の考察——版種を中心として——『国文学研究』64（早稲田大学国文学会）1978.2および同氏『和漢音釈書言字考節用集』の考察——註文の検討——『国文学研究』71（同）1980.6参照。）
 いっぽう『増續大廣益會玉篇大全』は、関場武氏の研究によると、明治の末年に至るまでに17種の異版が刊行されている。（同氏「毛利貞齋編『増續大廣益會玉篇大全』」『藝文研究』36（慶應義塾大學藝文學會）1977.3参照。）
 ロニーの資料入手経路は不明だが、実際に手にしていたのは本文の記述より、『會玉篇大全』は安永9年版本と考えられる。（『書言字考』については注6参照。）
- (6) 三沢光博氏（1965）による。シーボルトは『日本叢書』として、『新增字林玉篇』（1834年）『和漢音釈書言字考』（1835年）『千字文』（1833年）などを発行していた。あるいは、『新增字林玉篇』もこれによったものか。
- (7) 谷口 巖氏（1978）による。
- (8) 森川 甫氏（1983）による。

(9) 飯田 史也氏 (1990) による。

(10) ロニーの会話べたを指摘する声は多い。たとえば、実際に彼と会った池田筑後守は、読むほうは大概の日本の文を読んで理解する力があるものの、会話のほうは日常の会話が大体通じる程度であると述べている(元治元年「池田筑後守復命書」)し、栗本鋤雲も会話力の弱さを指摘している(『暁窓追録』1869年)。*佐藤文樹氏(1972)による。

ロニー関係参考文献(発表年代順)

- | | | |
|--------|--|----------|
| 吉野 作造 | 明治初年西洋で発行した日本字の新聞に就て
新旧時代 1-1 | 1925.2 |
| 渡邊修二郎 | ローニーの日本関係著書
書物展望 4-12 | 1934.12 |
| 蛸原八郎解説 | 『世のうはさ／複製版』
書物展望社 | 1934 |
| 野村兼太郎 | 福沢先生とレオン・ド・ロニィ
福沢研究 4 (福沢先生研究会) | 1950 |
| 吉町 義雄 | ロニの日本国訛考
国語学 5
※同氏『北狄和語考』(笠間書院1977.12)所収 | 1951.2 |
| 三沢 光博 | 囉尼の「日本語考」
語文21 (日本大学国文学会) | 1965.6 |
| 松村 明 | 羅尼著『和法会話対訳』について
『近代語研究』第1集(近代語学会編)武蔵野書院 1965.7
※同氏『洋学資料と近代日本語の研究』(東京堂出版1970.8)所収 | |
| 佐藤 文樹 | レオン・ド・ロニー——フランスにおける日本研究の先駆者
上智大学 仏語・仏文学論集 7 | 1972.12 |
| 松原 秀一 | フランス東洋学とレオン・ド・ロニー——福沢諭吉との関連において——
福沢手帖 2 | 1974 |
| 西堀 昭 | フランスにおける日本仏学資料
仏蘭西学研究 7 (日本仏学史研究会) | 1976.5 |
| 谷口 巖 | レオン・ド・ロニー編『よのうはさ』—慶応四年パリ発行、日本字新聞のこと
愛知教育大学 国語国文学報31 | 1977.3 |
| 谷口 巖 | 新発見「よのうはさ」慶応4年 パリ発行の日本字新聞
日本古書通信42-8 | 1977.8 |
| 谷口 巖 | レオン・ド・ロニ一年譜及び著作目録ノート——その出生より明治6年まで(1837～1873)——
愛知教育大学研究報告27 人文科学・社会科学 | 1978.3 |
| 松原 秀一 | ことばに魅せられし人々-6,7-レオン・ド・ロニー-上,下-
言語10-2,3 | 1981.2,3 |

- 高橋邦太郎 親日家・羅尼 日本語新聞「世のうはさ」
明治村通信12-10 1981
* 同氏『日仏の交流——友好三百八十年』（三修社 1982.5）所収
- 森川 甫 ロニの東洋語学校日本語講座開講講演（1863年）
関西学院大学社会学部紀要47 1983.12
- 熊沢 精次 フランスの日本語教育史 レオン・ド・ロニーを中心に
日本語教育（日本語教育学会）60 1986.9
- 松原 秀一 レオン・ド・ロニ略伝
近代日本研究3（慶應義塾大學福澤研究センター）1986
- 熊沢 精次 Léon de Rosny “Résumé des principales connaissances nécessaires pour l'étude de la langue japonaise”（1854年）について
日本語と日本語教育16（慶應義塾大學国際センター）1988.3
- 飯田 史也 19世紀フランスにおける日本語研究に関する史的考察（その1）——人称代名詞を中心にして——
広島大学教育学部留学生日本語教育・日本語教育学科『留学生日本語教育に関する理論的・実践的研究』 1989.3
- 飯田 史也 19世紀フランスにおける日本学の進展——日本語文法書の発達を中心にして——
福岡教育大学紀要39 第4分冊 1990

〔付記〕本稿の作成にあたっては、第2章の翻訳を柳浦が担当し、それを基礎資料として合議した結果を大橋がまとめた。